

## 第8回 キリスト教の神観2 - 三位一体の神

### <前回のまとめ>

#### 聖書の神とは

1. 神は人格的な存在である、霊的存在である  
二つの要素（超越と内在）とそのバランスが大切。  
見えない（不可視的）、見てはいけない（偶像禁止）  
人間の経験をはるかに超えている、人間のコントロールできる存在ではない  
祈りにおける関わり（交わり）  
日常の様々な領域で神の力が経験される
2. 父なる神と主（王）なる神  
天地の創造者、そして歴史の支配者（民族を歴史を通して救済へと導いている）  
「主は共にいる」「インマヌエル」（ヨシュア記 1:9 / マタイ 1:23）
3. イエス・キリストの教えた「主の祈り」、イエスの示す父のイメージ  
「父」イメージの時代的な変化。人間の生みだしたイメージを神に読み込みすぎると変なことになる。神の超越性を一方でしっかり捉えていることが必要である。
4. 父なる神への信仰が生み出すもの  
父なる神の力は、人間を非人間化するもの（罪・悪）への怒りとして、それを変革するものとして現れる。この父なる神に信頼して生きるということは、様々な仕方で具体化される。マリアの賛歌

### 1 三位一体論とは

- ・ユダヤ教やイスラームとの違いのポイント、もっともキリスト教らしい教え
- ・父、子、聖霊の三つのペルソナ（位各）が同本質的である
- ・4世紀に激しい論争を経て正統教理として確立した  
ニケア公会議
- ・聖書自体の中には、「三位一体」という表現そのものは存在しない。ポイントはキリスト論
- ・信仰・体験との関わりで、神の三一性の意味を考える

### <コリントの信徒への手紙2>

13:13 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。

## 2 なぜ三位一体なのか(1)

わたしたちは、どのようにして神について知ることができるのか

父なる神：天地の創造者 自然を通して神について知る(ローマ1:18-23)

自然を通しての神の知識で十分か、あいまいさ、明確な基準の必要性

イエス・キリストの出来事における神の啓示 聖書を通して

聖書の正しい理解はどうしたら可能になるのか

聖霊の導きによって(靈感・インスピレーション)

### ローマの信徒への手紙

1:18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。24 そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。25 神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拜んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。

## 3 なぜ三位一体なのか(2)

神へ信頼しつつ生きること

神の愛は変わらない・神の誠実さ 父なる神

神の愛の明確な現れ・しるし イエス・キリストの出来事

神の愛の確かな実感 聖霊の証(教会)

## 4 なぜ三位一体なのか(3)

キリスト教の聖書が、旧約聖書と新約聖書の二つの部分からなる一冊の書物であることの意味

旧約聖書の宗教との連続性、新約聖書の出来事の新しさ。預言と成就

古い契約と新しい契約との違いと契約の当事者である神の同一性

## 5 三位一体論の現代的意義

新約聖書の文書の担い手の多くは、ユダヤ教の伝統の中からキリスト教へと回心した人

々であった。この回心は、現代の日本人がキリスト教を信仰する際にも経験すること。旧約聖書と新約聖書、古い契約と新しい契約という対比は、日本人の回心のモデル・基準となる。

聖書 (モデル): 旧約聖書	回心	新約聖書
古い生き方	回心	新しい生き方
	三位一体的な神理解の基盤	
		・ 回心前後の生き方の転換 (キリストの出来事の決定的な意味・衝撃)
		・ 回心前も同じ神の愛(神の誠実)の内にあったことの確認
		・ 神の誠実さの日々の信仰生活における実感

日本人の回心：古い生き方（伝統的な考え方・宗教性）

新しいキリスト教信仰

- ・ 回心はキリストとの出会いにおいて引き起こされた
- ・ 信仰的に振り返れば、父なる神は、キリスト教伝来以前の日本人と無関係ではなかったことが、確認できる。
- ・ 神の働きを繰り返し実感しつつ生きる

ガラテヤの信徒への手紙

1:12 わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。13 あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。 わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。14 また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。15 しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、16 御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、17 また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもとに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのでした。

#### <参考文献>

- ・ 大貫 隆他編 『岩波 キリスト教辞典』岩波書店
- ・ J. ダニエルー 『キリスト教史 1 初代教会』平凡社ライブラリー
- ・ H. I. マルー 『キリスト教史 2 教父時代』平凡社ライブラリー
- ・ 「キリスト教思想文献表」( <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub9a.pdf> )、 「キリスト教思想・宗教思想研究文献表」( <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/user/sashina/sub9a1.htm> )